AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2023 年 10 月 25 日　VOL.46　第 307 号
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

2023 年
秋 号
秋

救える命があればどこまでも

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第 38 回
インドネシア・ハサヌディン大学農学部 AMDA マリノ農場　ランピセラ教授

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、インドネシア・ハサヌディン大学農学部のドロテア・アグネス・ランピセラ教授です。

（聞き手：AMDA 本部　近持　雄一郎）

AMDA　先生は AMDA がインドネシアで有機農業を行っている『AMDA マリノ農場』の運営に携わっておられます。最初に AMDA について知ったのはいつのことでしたか？

ランピセラ　たしか留学先の京都から帰国してからだと思います。京都大学の大学院で、修士課程と博士課程を終えたのですが、その頃は主に砂防（林学）や環境における水の循環について学んでいました。「水文学」なんて聞いたことないでしょ（笑）。考えてみれば、砂防は今 AMDA が注力している防災の一環といえるかもしれません。

AMDA　水文学とは？

ランピセラ　地域でどうやって水を接取するかとか、灌漑用水の分配についてとか、そういったことに関する学問ですね。所属は農学部ですが、以来、水に関する研究をずっとやっています。

AMDA　実際に AMDA の活動と関わるようになったのは、やはり AMDA インドネシア支部のタンラ支部長がきっかけでしょうか？

ランピセラ　留学を終え、母校で現在の勤務先でもあるハサヌディン大学に戻りました。その時、若手講師を統括していたのが医学部のタンラ教授でした。タンラ先生は、ご自身も広島大学に留学しており、すでに AMDA インドネシア支部の活動を始めていたので、日本帰りの私に声が掛かったというわけです。

AMDA　菅波理事長との出会いは？

ランピセラ　日本で行われた会議にインドネシア支部の代表として参加した時ですね。その後、しばらくして AMDA の災害関連の会議が行われたのですが、その時に初めて岡山県の新庄村を訪ねました。これが現在のマリノ農場をはじめとする『AMDA フードプログラム』の発端となるわけですが、この時、有機農業を含む、農業の重要性を改めて実感したのです。

AMDA　インドネシアにも以前から有機農業はあったのでしょうか？

ランピセラ　必ずしも真新しいものではありませんでしたが、外国人の多いバリ島など一部の地域を除いては･･･という感じでした。それが、新庄村を訪れた際、菅波先生が強調していた“食と健康の繋がり”を強く感じたんですね。そしたら、菅波先生が、「是非インドネシアから研修生を呼んで、プロジェクトにしよう」と。

AMDA　「食は命の源」という AMDA フードプログラムの考え方ですね。

ランピセラ　あの時の経験は大変意義深いものでした。その後、インドネシアから二人の研修生が来日し、新庄村で数ヶ月間研修を受けることになるのですが、そのうちの一人は現在でもマリノ農場の牽引役を担っています。

AMDA　来年でマリノ農場も 10 周年を迎えます。AMDA フードプログラムにとっても節目の年となりますが、今後の展望はいかがでしょうか？

ランピセラ　今後注目していきたいのは、サゴヤシという農作物です。近い将来、食糧危機の可能性が指摘されていますが、サゴヤシから採れるでんぷんは食糧としての利用価値が大変高く、小麦粉や米に代替する作物ではないかと思います。そもそもサゴヤシの重要性を見出したのは日本の研究者なんですよ。

AMDA　有機農業から食糧の確保という流れを考えると、今後の方向性として理に適っていますね。

ランピセラ　特にウクライナ危機以降、サゴヤシは徐々に注目を集めています。農作物として収穫ができるようになるには 7、8 年かかりますが、今から 10 ヵ年計画としてプロジェクトをスタートさせれば、時勢に見合った結果が得られるのではないでしょうか。

AMDA　今後の展開に注目していきたいと思います。本日は貴重なお時間をありがとうございました。

ウクライナ人道支援活動　連携４団体の活動内容

現在もウクライナ国内では深刻な状況が続いており、人々の生活は困難を極めています。AMDA は、ハンガリーの２団体およびウクライナの２団体と合同で、現地団体主導のもと、継続的な支援を行っています。尚、この活動は外務省の日本 NGO 連携無償資金協力事業としても採択され、ウクライナでの医薬品を含む物資支援などに充てられています。

ハンガリー側：ヴァルダ伝統文化協会

キシュバールダ（ウクライナ国境から約 20 キロ）にある団体で、ウクライナ西側のウジホロド地域の医療施設などへ、必要な物資を継続的に届けています。

今年の８月からは、トランスカルパティア州の国内避難者のケアを行う施設へ、定期的な冷凍食品の配布を開始しました。また、今年６月、ウクライナ南部ヘルソン地域において発生したダム決壊による大規模な洪水被害に対しても、現地自治体と協力して、二度にわたり食品や日用品の配布を実施しました。

ハンガリー側：メドスポット

ハンガリー側の国境の村ベレグスラーニーにあるヘルプセンターで、AMDA とともに活動した医療団体です。

現在は、ウクライナの戦闘地域から避難してきた方々の診察やメンタルヘルスケアをウクライナの西側の地域で行っています。避難してきた方のほとんどは、主治医はおろか知り合いもいません。放置されることなく、専門医による診察を受けることは、とても重要です。今年７月には、約 200 人の方に診察や投薬などの医療支援を届けることができました。また、息子が行方不明の女性や、乳幼児を連れた若い母親など、大きな不安を抱えながら避難してきた方も多く、心理的なサポートも求められています。

ウクライナ側：セントミッシェル小児総合医療センター

ウクライナ西部に位置する、子どものリハビリに特化した施設です。がん患者の薬物療法の支援、子どもの家へのブランケットやベッドシーツの配布、避難してきた家族ができたての食事をとれるような機会の提供など、活動は多岐にわたっています。

がん闘病者の中には、夫の収入だけでは治療薬を購入できず、AMDA の支援により、治療を受けている２人の小さな子どもがいる母親もいます。すべての支援が、支援を最も必要としている人のところに届くよう実施されています。

ウクライナ側：ダイナスティメディカルセンター

ダイナスティメディカルセンター周辺の人々へ、医療、食糧、燃料、暖房器具などの支援を継続して行っています。

失業や 50％以上の物価上昇などにより、治療や医薬品を買うことが経済的に難しくなっています。そのような中、８月７日と９日の２日間で、合計約 250 人に無料の治療と薬の処方を行いました。また、高品質の麻酔薬の使用により、術後の仕事復帰がスムーズに進んだという方もおり、感謝の言葉を述べておられました。

（AMDA スタッフ　大原　瑞萌）

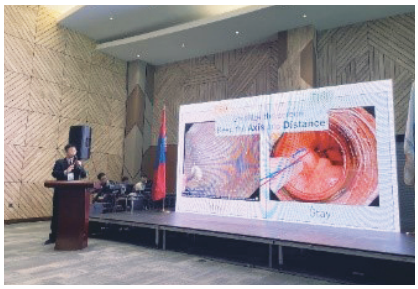
AMDA モンゴル内視鏡技術移転事業および救命救急研修

AMDA モンゴル内視鏡技術移転事業ならびに救命救急研修が 6 月 27 日から 7 月 9 日までモンゴルにある日本モンゴル教育病院を中心に実施されました。

◆内視鏡技術移転事業

今回で 5 回目となる内視鏡技術移転事業は、本年度も小倉記念病院消化器内科主任部長の白井保之医師と AMDA 理事の佐藤拓史医師により（モンゴルの医師免許の下）、実施されました。今回モンゴル側から最も期待されたのは、同国初の内視鏡的硬化療法結紮術併用療法（EISL）による治療でした。日本から必要な器具・薬剤を持ち込み、モンゴルの内視鏡医とともに行いました。今回行ったのは、内視鏡治療とその他の治療を含め 29 例です。

また、現地での学会にも参加し、日本の内視鏡の様々な治療法を紹介しました。



～日本モンゴル教育病院消化器内科部長 ビャンバジャブ医師のコメント～

「今回、食道・胃静脈瘤の患者 9 人に対し、EISL（食道胃静脈瘤硬化療法）治療をモンゴルで初めて行い、成功させることができました。AMDA の皆さんには、この治療の将来的な実施についてアドバイスや提言をしていただき、今後、私たち自身で実践していくための方法をともに探りました。さらに、理論に基づいた臨床実習、シミュレーターを使った実習、外科・病理部門との合同カンファレンス、救命救急医へのセミナーと実習は非常に効果的でした」

～小倉記念病院消化器内科主任部長 白井保之医師のコメント～

「静脈瘤の治療の際、最初は私が関わったものの、最後はモンゴルの医師だけでも治療ができるようになっていました。今後モンゴルにおいて特定の医療機器と薬剤が承認され、普及していくことを願っています」

◆救命救急研修

2017 年よりコロナ禍の 2 年間を除いて、AMDA はモンゴルで佐藤医師による救命救急研修を毎年実施しています。今年は、7 月 3 日にモンゴル国立鉄道病院で、また 7 月 5 日に日本モンゴル教育病院で、実際に救急の現場で活躍する医師を対象に行いました。

モンゴル国立鉄道病院は、モンゴル国内の鉄道の駅近くに 27 ヶ所の支部の病院があり、診療の対象となる職員とその家族の人数は総勢 16,000 人を超えます。病院列車もあり、モンゴルの 21 ある県のうち 8 県を巡回しています。今回、同病院において、22 名の現場医師の参加の下、FAST（外傷の初期診療における迅速簡易超音波検査法）と骨髄輸液のセミナーが実施されました。「次回は是非、佐藤医師に実際に列車に同乗していただき、研修を行ってほしい」との依頼がありました。

また 7 月 5 日に日本モンゴル教育病院で行われた研修にも 23 名の医師が参加しました。 尚、今回の活動については、駐モンゴル日本大使館の小林弘之大使を表敬訪問し、報告いたしました。

～「今回の事業を終えて」AMDA 理事 佐藤拓史医師のコメント～

「2017 年 9 月の事業開始から 6 年。新型コロナ感染症などを乗り越えて、モンゴルの内視鏡、救命救急のいずれも、現地の医師たちの努力により、その技術力は格段に向上していることを今回大きな手ごたえとして感じています。当事業にご支援をいただいている多くの皆様に心からの感謝を表し、以上、報告といたします」

（AMDA 理事　難波　妙）

AMDA 中学高校生会が高知県黒潮町の中高生と交流し、地域防災訓練に参加

2023 年 9 月 2 日（土）、AMDA 中学高校生会は高知県黒潮町を訪れ、高知県立大方高校、黒潮町立佐賀中学校、黒潮町立大方中学校との交流会を実施しました。2017 年から始まったこの交流会は、毎年実施され、今年で 7 回目となります。今回、AMDA 中学高校生会のメンバーは、「防災食」と「海外の防災意識と被災時の在・訪日外国人の避難」について、黒潮町の中高生の皆さんは、それぞれの学内で行っている「防災訓練・防災活動」について発表しました。続いて、全員が 4 つのグループに分かれ、大方高校独自の HUG（避難所運営ゲーム）を使って、避難所運営について学びました。黒潮町の中高生や住民の方は日頃から防災を意識しており、地域の協力と意識の高さを実感しました。交流会の後、AMDA 中学高校生会メンバーは、高知県幡多青少年の家の職員の方より、野外炊飯で災害時を想定したアルミ缶炊飯やカレーの作り方を教えてもらい、実際に自分たちでも作ってみました。

また翌日、9 月 3 日（日）には、黒潮町で町民一斉の防災訓練があり、AMDA 中学高校生会のメンバーは伊与喜幼稚園の医療救護所訓練に、旅行中、災害に巻き込まれて被害に遭ったことを想定した患者役で参加。消防団、保健師、住民ボランティアの方とともに、トリアージと搬送までの訓練を体験しました。患者役としてトリアージを受けるのは初めてで、最初は戸惑っていたような感じもありましたが、どのような手順でトリアージの色分けをしていくのかを知る良い機会になったと思いました。訓練後に参加者の反省会に参加し、災害は突然発生するので、平時からの防災訓練の大切さを改めて実感しました。

～参加者の代表として AMDA 中高生会のリーダー 植野涼子さんの感想～

「今回の黒潮町での交流会を通して、防災について今までとは別の視点から考えることができました。今まで、防災と聞くと負のイメージが大きかったです。しかし、黒潮町交流会に向けての準備や、黒潮町の方の発表、HUG を通じて、『みんなと一緒に対策することで楽しみながら取り組める』ということを実感することができました。 そして、黒潮町の方々が防災に前向きに取り組んでいる、街をあげて取り組んでいる姿を見て、『すごいな』と思いました。 今回学んだことを、AMDA 内で共有して終わりにするのではなく、AMDA 以外の方にも伝えていきたいです。また何かしらの形で私たちも防災活動に積極的に参加していきたいです」

～黒潮町佐賀中学校 3 年生の防災委員長 伊與木芽生さんの感想～

「今回の AMDA 中学高校生会との交流会を通じて、まず大方高校で取り組んでいる HUG を自分たちの学校でも行えば、中学校から避難した後の流れを中学生も積極的に実践できると考えました。また AMDA の方の取り組みも知ることができ、翌日の日曜日に AMDA の方々が活動に来ていたと親から聞きました。幅広く活動しているんだなと思いました」

（AMDA 中学高校生会担当　アルチャナ　ジョシ）

AMDA 中学高校生会がネパール研修を実施

8 月 12 日から 19 日まで、AMDA 中学高校生会はネパール研修を実施し、2 名の高校生がこの研修に参加しました。二人は、カトマンズの私立高校に通っている 1 年生 3 人と英語で交流し、それぞれの国の歴史、防災訓練、防災文化、日本の文化などについてお互いに発表しました。その後、ネパール東部にあるダマックに飛行機で移動し、AMDA ダマック病院を訪問しました。同病院の産婦人科病棟の手術室で帝王切開に立ち合い、素晴らしい命の誕生を目の当たりにした二人は、心から感動していました。その後、内視鏡検査室を訪問し、担当医から、「毎年日本から医師が派遣され、技術指導を受けている。そこで学んだことを生かして、地元の人たちに対し、上部および下部消化管内視鏡検査を行っている」と聞かされました。二人は、日本の医療を、首都カトマンズまで行かなくても、地方で受けられることに感心していました。また、AMDA ネパールの専門学校で勉強している看護学生の 2 年生 40 名との交流では、日本の防災と日本文化を紹介し、看護学生からはネパールの文化を紹介してもらいました。その後、お互いの民族衣装を着て、歌ったり、ダンスを踊ったり、とても積極的に交流しました。交流は、同年代の参加者を中心に行われ、肌で異文化を感じて多くのことを学んでいました。

～参加者の感想～

大谷愛莉さん（高校 3 年生）

「今回の研修で、私は、以前より興味のあった防災に着目し、現地の方と交流を行いました。私立学生や看護学生と情報を共有する中で、ネパールで行われている防災の ” 今 ” を知り、ただ日本の防災を広めるだけでは不十分であることを学ぶことができました。この研修は私の将来に間違いなく繋がると思います」

假谷采永さん（高校 1 年生）

「今回のネパール研修では、AMDA ネパール支部が運営する病院を訪問し、看護学生や医療従事者の方々と交流しました。さらに、現地の高校生や職業訓練場の女性の方々と交流を行い、お互いの国の文化を紹介したり、世界遺産を訪れたりと、肌で異文化を感じる機会となりました」

（AMDA 中学高校生会担当　アルチャナ　ジョシ）

サラスワティ・シス・ニケタン学校（インド・ブッダガヤ）への教育支援

AMDA は、インド・ブッダガヤにおいて、現地協力団体の NGO『エコラス・デ・ラ・テラ福祉団』と一緒に活動を行っています。同団体の事務局長から、生徒たちへの学習支援協力の要請を受け、AMDA は、今年 4 月に同団体が経営するサラスワティ・シス・ニケタン学校の生徒 392 人に物資を提供。教科書、文房具、カバン等の贈呈式を行いました。事務局長のラゼッシュ氏から、「この学校で勉強している生徒たちのほとんどが貧しい家庭の子供たちなので、勉強に必要な物を購入できず困っていました。AMDA から支援をしていただき、生徒たちはとても喜んでおります。AMDA の皆様に心より感謝申し上げます」とお礼のメールが届きました。また、「教科書、文房具と一緒にカバンももらったので、通学にとても便利です。一生懸命に勉強します」と生徒からも喜びの声がありました。

（インド事業担当　アルチャナ　ジョシ）

使わないで眠っている年賀はがき、官製はがき、切手はありませんか

切手、ハガキは未使用のものであれば、古いものでも差し支えありません。ご協力よろしくお願いいたします。

書き損じはがき、未使用切手等を右記までお送りください。

〒700-0013
岡山県岡山市北区伊福町3-31-1
特定非営利活動法人　アムダ
「書き損じハガキ・切手」担当　行

■ 高知県による第８回南海トラフ地震防災対策協議会に参加

８月２日、AMDA は、高知県、高知市、須崎市、黒潮町が合同で行う南海トラフ地震防災対策協議会に参加しました。コロナ禍ではオンラインで参加していましたが、８回目の開催となる今回の会議は、高知県庁本庁３階にある防災作戦室にて対面で行われました。光多長温 AMDA 政策担当顧問、後藤和雄 AMDA 政策担当顧問、筆者の３名が高知県庁に伺いました。

AMDA からの報告として、南海トラフ災害対応プラットフォームや、南海トラフ関連の活動、ウクライナ避難者支援等について報告し、また９月に黒潮町で行われる AMDA 中学高校生会と町内の中高生との交流事業、ならびに町民が参加して一斉に行われる防災訓練に参加することを報告しました。

一方、高知県からは、主に高知港の整備における進捗状況や、災害時の医療救護体制に関する報告があり、高知市、須崎市、黒潮町からは、防災訓練の実施を中心とした報告がありました。協議会終了後、AMDA からの参加者３名は高知市内にある津波避難タワーを視察しました。

（AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部　本部長　大西　彰）

■ コープフェスタ 2023 に参加して

９月 23 日､コンベックス岡山で開催された『コープフェスタ 2023』（主催：生活協同組合おかやまコープ）に、平和・国際協力支援等の取り組みのお知らせをする目的で、AMDA からも出展しました。AMDA の活動を紹介するため、緊急救援活動等のパネル展示や活動地の民族衣装を試着できる体験コーナーを設けました。

また東北の物産や手作りの手芸品を置いて、来場者の方に販売するコーナーも設置しました。手芸品を購入されたお子さんに、「このお金は東日本の復興に使われるのよ」とお母さんがお話ししてくださっている様子が印象的でした。

（総務担当　太田　浩子）

■ 四国銀行『学び応援債～未来への絆～』（AMDA こども食堂支援プラットフォーム）

地域の未来を担う「こどもたち」をサポートすることで、こどもたちの健やかな成長を応援し、地域社会の発展に貢献することを目的とした「学び応援債」は、株式会社四国銀行様が受け取る私募債発行手数料の一部で物品などを寄贈する仕組みです。今回は株式会社アネックス様が学び応援債の支援先として AMDA こども食堂支援プラットフォーム事業を指定し、しょうゆ、マヨネーズなどの調味料や使い捨て容器、割りばしなどをご寄贈くださいました。それらは、８月 29 日に岡山県内のこども食堂 10 団体に配布しました。

こども食堂を運営する方々からお礼の言葉のほか「物価高になり高くて十分買えないので感謝です」「こども食堂へ参加するこどもが増えてきているので、使い捨て容器やわりばしは助かります」と感謝されました。

（財務部長　難波　比加理）

■ 働くことをテーマにした『連合岡山フェスタ』にパネル展示で参加

７月１日（土）、コンベックス岡山にて、雨天ではありましたが、県内各地より約１万人が訪れ、『連合岡山フェスタ』が開催されました。AMDA と日本労働組合総連合会岡山県連合会（連合岡山）は、2021 年９月 21 日に「災害発生時における緊急医療支援活動実施に関する連携協定書」を取り交わしたこともあり、今回、AMDA は活動のパネル展示で参加をさせていただきました。

（AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部
本部長　大西　彰）

菅波理事長による AMDA インドネシア支部訪問記

～スラウェシ島マカッサル市の著しい近代化～

今年 8 月 1 日から 7 日まで、AMDA インドネシア支部を訪問しました。同支部は、スラウェシ島（南スラウェシ州）のマカッサル市にあるハサヌディン大学とムスリム大学に立脚しています。ハサヌディン大学は、西パプア州地域を含む、インドネシア共和国の東部分を担当している重要な国立大学です。以前は、独立した東チモールもその管轄内にありました。ちなみに、スルタン・ハサヌディンとは、スペインに対して武力闘争を展開したイスラム教のスルタン（指導者）です。スルタン・ハサヌディン国際空港の正面玄関前の像にその雄姿を見ることができます。

2022 年 11 月、インドネシア・西ジャワ州チアンジュール地震被災者支援活動に出発する医療チーム

2 年ぶりに訪れたマカッサル市内は大きく変容していました。市内からスルタン・ハサヌディン国際空港への建設中の高速道路が交通渋滞を起こしていましたが、圧倒的に車両の数が増えていました。その数日後に訪れたマリノ地区の石積みの村でも、2 年前は数台だった車両が多くの家で見られました。世界の富はアジアに向かっています。中国から東南アジアへと確実に浸透していることを実感しました。

ちなみに、「イスラム」はイスラム教、「ムスリム」はイスラム教徒をそれぞれ意味します。「仏教と仏教徒」、「キリスト教とキリスト教徒」の如しです。このマカッサルに、20 年ほど前、『イスラム大学』が発足し、先述の ” ムスリム大学 ” との区別が必要となりました。

スラウェシ島は、マカッサル人、ブギス人、トラジャ人などの 4 部族から成り立っています。AMDA インドネシア支部の支部長を務めるハサヌディン大学のタンラ教授は、ブギス族のスルタンです。ブギスは新進の気性と航海術に秀でており、シンガポールにはブギスの地域があるほどです。ただし、ブギスの航海術は星を頼りに行動する単純な方法です。

AMSA インドネシアのメンバーとともに（前列左から 2 番目がタンラ教授）

数年前にジャワの男性とブギスの女性の結婚披露宴に参加したことがありました。ブギスの男性は刀を武士のように左の腰に持っており、ジャワの男性は刀を背中に持っていました。ブギスの男性は勇猛、ジャワの男性は理性的。刀を差す場所でよく理解できました。

AMDA インドネシア支部は、ハサヌディン大学医学部の教授陣を中心に構成されています。タンラ教授に加えて、整形外科教授であり、前ハサヌディン大学長だったパトルシ教授らも、ブギスのスルタンです。AMDA インドネシア支部の災害医療活動は、AMDA インターナショナルの中でも群を抜いて行動的です。2004 年のスマトラ沖地震・津波の時には、AMDA 支部 8 ヶ国から 100 名近くの医療スタッフを派遣しましたが、3,000 キロ離れたハサヌディン大学からは、延べ 300 名以上の医療スタッフが被災地アチェに派遣されました。パトルシ教授自らがアチェの被災地で陣頭指揮を執りました。

AMDA インドネシア支部は、インドネシア国内で災害があれば、必ず医療チームを派遣します。ハサヌディン大学とムスリム大学の卒業生の多くの医師が AMDA に関心を持ってくれています。AMSA（アジア医学生協議会）、AMDA、そして AMSA Alumni Club（AMSA の同窓組織）の 3 者が連携して世界平和に貢献する素晴らしい可能性を秘めていると期待しています。